

青山学院大学大学院

年度	2026
研究科	文学
専攻	日本文学・日本語
課程	博士前期
入試種別	博士前期課程入試（秋）
試験科目	専門知識
科目詳細	読解・論述を含む
解答区分（該当に○）	○解答・○解答例・評価基準・○具体的な出題意図・解答のポイント・略解

第一問 解答例

A
挽歌は、雑歌・相聞歌とともに『萬葉集』の三大部立てを構成する。「挽歌」の語は中国文学に由来し、本来「柩を挽く時の歌」を意味するが、『萬葉集』では広く人の死に関わる歌を指す。人の死に関わる歌は、『古事記』『日本書紀』の歌謡にも見えるが、それらは七世紀前半の初期萬葉の時代と重なる。挽歌が本格的に制作されるのは『萬葉集』においてである。挽歌は天智天皇、天武天皇とその皇子・皇女の生前の功績を称え、永く記憶するために作られ始めた。柿本人麻呂は、挽歌において生と死の激しい落差や、死を超えて思い続ける心の表現を発達させた。人麻呂は妻の死を悼む挽歌も制作し、それらをより個人の心情に即して表現する技術を拓いた。

B
『源氏物語』の季節表現は、単なる物語の背景に止まらず、登場人物たちが生きる世界の枠組みとなっている。登場人物たちは季節の循環の中を生きる。その典型が、光源氏の邸宅・六条院である。光源氏は四季に対応する形で建物を造営し、それぞれに愛する女性を住ませた。それは季節という時間を支配する帝王像を表している。また、季節の変化がもたらす感情の起伏は、登場人物たちを次の行動に導く。例えば、滅びに向かう秋のもの悲しい情感の表現が、光源氏の、しばらく関係を断っていた六条御息所を訪う心情を必然的なものとしている。なお、これらの季節表現は、『古今和歌集』において、都の自然を基に創出された抽象的なものに拠っている。

C
古代の物語を擬した物語の意で、平安時代の作り物語の系譜を受けて、主として鎌倉時代・南北朝時代に成立したものを指す。武家政権下に、貴族が平安時代を追慕したものと考えられる。『無名草子』や『風葉和歌集』には擬古物語の作品名が多数挙げられるが、そのうち現存するのは三十編ほどである。主な作品としては典型的な継子いじめの物語である『住吉物語』、唐を舞台とする『松浦宮物語』、宮廷男女の悲恋物語の『しのびね』などがある。『源氏物語』『狭衣物語』の影響が強く、単なる模倣とも捉えられがちであるが、様々な工夫が凝らされている。江戸時代にも国学者たちの余技として擬古物語の執筆が試みられてもいる。

D
仮名草子とは漢文による学問の書に対して、平易な仮名で書かれた読み物の意。西鶴以降の浮世草子に対して、それ以前の作品を仮名草子と総称する。その特徴に啓蒙性、娯楽性、実用性などが挙げられる。啓蒙的な作品としては如備子の『可笑記』は警世の書としても読まれた。『女郎花物語』などの女訓書もある。娯楽的なものとしては書簡体の恋愛小説『薄雪物語』、笑話集の『醒睡笑』、中国小説の翻案物としては怪談集の『伽婢子』、パロディとしては『枕草子』をもじった『犬枕』、『伊勢物語』をもじった『仁勢物語』がある。実用的なものとしては軍記的な記録である『信長記』『太閤記』、名所記としては『竹斎』『東海道名所記』がある。

E
一九三八（昭和十三）年三月、『中央公論』に発表された石川達三の長編小説である。一九三七年七月七日の盧溝橋事件にはじまる日中戦争下、同年、石川が中央公論社特派員として中支戦線に従軍した経験をもとに書かれた。日本兵の残虐な生態、戦線にかり出されて変貌していく青年たちの姿などがルポ的手法により描かれている。あまりに克明に日本軍の残虐行為が書かれていたため、発表後、石川は新聞紙法違反に問われ、中央公論の編集者とともに起訴された。当時の文学作品に国策として戦争を描くことの限界について、モデルケースとなったことで知られている。戦後になって初めて河出書房から公刊された。

F
一九六一（昭和三六）年に始まる「純文学」の存在理由をめぐる論争。大岡昇平が「常識的文学論」の中で当時隆盛していた中間小説・大衆文学を論難したのに対して、同年、平野謙が、「純文学」（私小説）を歴史的概念に過ぎないと発言したことに端を発する。この後、伊藤整もまた「純文学」の根拠に疑義を提出するが、これに対して高見順が古風な「文士」の立場から平野を批判、また瀬沼茂樹が「純文学」の概念の歴史的な意義を強調した。この高見、瀬沼に対して平野はさらに応戦し、昭和一〇年前後に見られた文学理念の可能性に、同時代の文学状況を打破する契機を見出そうとしている主旨の論を展開した。この論争は決着がつかずに終わった。

G
方言圏論によれば、文化の中心地である中央語で発生した新語が波紋のように周辺地域に広がり、古語を次第に辺境におしやった結果、離れた地に語の一致がみられるとされる。方言圏論は、柳田国男「蝸牛考」において、カタツムリをさす言葉の全国分布をもとに唱えられた。それによれば、近畿とその周辺に分布するデンデンムシ系が一番新しい言い方であり、その外側に分布するマイマイ系、カタツムリ系、ツブリ系、ナメクジ系の順により古い言い方であると推定される。

H
間接的言語行為とは、ある発語内行為を表現する典型的な形式の文が、別の発語内行為を間接的に遂行する現象を指す。たとえば、「お醤油取れますか？」のように、質問行為の典型的な形式である疑問文を用いて、依頼行為を遂行する場合などがその例となる。間接的言語行為は、ポライトネスとも深く関わっており、たとえば、「お醤油取ってください」のような直接的な依頼ではなく、「お醤油取れますか？」のような間接的な依頼を行うことの背後には、相手に対する配慮がうかがえる。

I
準体句とは主名詞が顕在していない連体句のことであり、古代語において広く認められる。一般に、準体句は、「[女君のいと美し

げなる] 生まれ給へり」のように、顕在していない主名詞にヒトやモノが想定される「モノ準体句」と、「[いみじき愁へに沈む]を見るに」のように、顕在していない主名詞にコトやノが想定される「コト準体句」とに大別される。準体句は時代を下ると次第に用いられなくなっていく。現代語では、たとえば、「[少年が坂を登って来る]を見た」という文は不自然であり、この場合、「[少年が坂を登って来る]のを見た」のように、準体助詞「の」を連体句末に付した形の文が自然である。

J

中国の春秋時代の魯の歴史を編年体で記した歴史書。五経の一つに数えられる。孔子がこの歴史書の原型を筆削したものとされる。孔子が『春秋』の原型に手を加え、文字を削除し、また加筆することを通じて、儒学の経世の理想に照らして、事件を評定したと考えられた。それは一字の修正、「一字褒貶」によって、史実に価値判断を下したという「春秋の筆法」として知られている。儒家にとっての『春秋』は「一字褒貶」の評価を読み取ることによって、聖賢の経世の思想を知る経典であり、そのためその解釈がさかんとなった。その一つが左丘明著とされる『春秋左氏伝』で、本書は『春秋』を史実や史話を用いて解説する。

第二問 解答

A群（日本文学専攻）

① イ ② ウ ③ ア ④ オ ⑤ エ ⑥ ウ ⑦ エ ⑧ イ ⑨ オ ⑩ ウ

B群（日本語専攻）

① イ ② オ ③ イ ④ イ ⑤ ア ⑥ オ ⑦ イ ⑧ ア ⑨ オ ⑩ エ

第三問 解答

A群（日本文学専攻）

a 日本書紀 b 長屋王（長屋王、文武天皇、安倍広庭、麻田陽春、春日老、紀男人、境部王、背奈王行文、刀利（土理）宣令、葛井広成、藤原宇合、藤原房前（総前）、藤原麻呂（万里）、山前王、山田三方（御方・御形）、吉田宜も可）

c 在原業平 d 伊勢物語 e 義堂周信 f 五山文学 g 柄井川柳 h 川柳

i 文藝時代（文芸時代） j 千葉亀雄 k 吉屋信子 l 少女画報 m 詩経 n 五経 o 桃花源花 p 志怪

B群（日本語専攻）

a 内容語 b 機能語 c 文法化 d レイコフ e 概念メタファー f 炎 g ダイグロシア h 高位言語

i 低位言語 j 複合辞 k 統語的複合動詞 l 意味役割 m 動作主 n 被動作主 o キリシタン資料

p ロドリゲス

第四問

「著作権の関係で解答は掲載しない」

第五問

A群（日本文学専攻）：

「著作権の関係で解答は掲載しない」

B群（日本語専攻）：出題の意図

複文における「は」と「が」の係り方の違いによってもたらされる文の解釈（後続節における主体は誰であるか）の違いについて、文法論的な観点からの説明を求める問題である。

青山学院大学大学院

年度	2026
研究科	文学
専攻	日本文学・日本語
課程	博士前期
入試種別	博士前期課程入試（春）
試験科目	専門知識
科目詳細	読解・論述を含む
解答区分（該当に○）	解答 ・ 解答例 ・ 評価基準 ・ 具体的な出題意図 ・ 解答のポイント ・ 略解

問1

日本文学、漢文学、日本語学等の分野にわたって、基礎的な知識とその記述能力を問う出題である。大学院における研究の発展のためには、幅広い素養が不可欠であるとの考えから、5問を選択する形式として、各々200字相当の記述を求めている。

具体的には、人物、作品、文学状況、概念、用語等、さまざまな面からの出題であり、基礎的な問題ではあるものの、個々の事項に対して要求する字数は少なくない。通り一遍の知識ではなく、文学、語学にわたる理解力を問うものとなっている。

たとえば、「A 大伴旅人」の場合であれば、生存時期、家系、経歴、業績とその意義、残した和歌など、多面的におさえる必要があり、他の項目についてもおおむね同様である。個々の事柄が領域や時代などと具体的にどのように関わっているか、ということを引きちんと押さえているかどうか、そのような力を問う出題である。

問2

日本文学、漢文学、日本語学等の分野にわたって、専門的な素養を見る問題であり、2題、各々400字相当の論述問題である。問1とは異なり、比較的大きなテーマについて、十分な知識を有しているか、また、それに基づいたしっかりとした記述ができるかどうかを見る問題であるが、知識そのものよりも、要求される問いに対して、どのような構想を以て制限字数の中でまとめた文章が書けるか、また知識の適切な取捨選択によって要求に応えるか、という能力を問うものである。テーマに比して、解答として要求する分量をやや抑えめにしているのは、そのためである。

たとえば、「B 日本中古文学における物語文学の展開について、簡潔かつ具体的に説明しなさい。」という問いの場合、作品名と作者、内容の羅列によっても、解答欄は埋められよう。しかし、そうではなく、竹取物語に始まる作り物語と歌物語との関係、源氏物語を境とする前期物語と後期物語の関係、男性作者から女性作者への移行、さらには日記文学との関わりなど、テーマの要求を把握して、「展開」を生き生きと捉えられているかどうかを問っている。その他の問題についても同様であって、設問にもあるように、抽象的な叙述ではなく、具体的な事例に焦点を当てながら、まとまりのある論述ができるかどうかを見ようとするものである。